12 月 5 日のメッセージ

聖書：エレミヤ書　36：　1 – 10

「主の言葉」

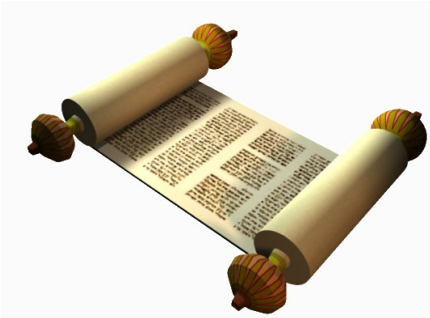
「わたしに聞け」と神は呼びかけられました。そして、その呼びかけに応えた私たちの心には希望=神の教えが置かれています(イザヤ書 51:7)。この神の教えは、言うまでもありませんが完全で、私たちの心に、そして全ての人々の心に喜びをもたらすものです(「主の律法は完全で、魂を生き返らせ／主の定めは真実で、無知な人に知恵を与える。」詩編 19:8)。だから人々は神の律法に忠実に生きてきました。また、生きようと道を選んできました。

しかし、神の約束はなかなか実現しません。またここで人間の悪い虫が蠢きだします。あの「待てない」という虫です。「その時」が来るまで待つことができません。神が与えてくださる希望の言葉を自分の聞きたいように聞く者たちが現れます(「だれも健全な教えを聞こうとしない時が来ます。そのとき、人々は自分に都合の良いことを聞こうと、好き勝手に教師たちを寄せ集め、真理から耳を背け、作り話の方にそれて行くようになります。」テモテへの手紙二 4:3-4)。一方、神の言葉よりも人間が定めた決まり事に心を向けるようになる者たちも現れます(「人間の戒めを教えとしておしえ、／むなしくわたしをあがめている。」マルコによる福音書 7:7)。

どちらの立場もその根っこにあるのは同じです。「自分が楽になるため」です。自分たちだけは大丈夫と言い聞かせるために神の言葉を都合良く解釈したり、神の言葉よりも人間の決まり事を大切にしたりするのです。「待てない」自分を何とかごまかして生きようとしています。

どちらも神の言葉をないがしろにする行為です(「イエスは言われた。『イザヤは、あなたたちのような偽善者のことを見事に預言したものだ。彼はこう書いている。「この民は口先ではわたしを敬うが、／その心はわたしから遠く離れている。」』」マルコによる福音書 7:6)。神の言葉を神の言葉として聞こうとしていません。ひいては神そのものをないがしろにしています。

しかし神は、そのような人々をも見捨てることなく、そのような人々に向かってあらためて言葉を語れと命じられます(「巻物を取り、……あなたに語ってきた言葉を残らず書き記しなさい。ユダの家は、わたしがくだそうと考えているすべての災いを聞いて、それぞれ悪の道から立ち帰るかもしれない。そうすれば、わたしは彼らの罪と咎を赦す。」エレミヤ書 36:2-3)。神の言葉は確実なのだから、それを伝えて行けと。それを聞いた人々が立ち帰るのをいつまでも待っておられるのです。だから、何度も、何度も、主の言葉を語れと命じられるのです(「お前は断食の日に行って、わたしが口述したとおりに書き記したこの巻物から主の言葉を読み、神殿に集まった人々に聞かせなさい。また、ユダの町々から上って来るすべての人々にも読み聞かせなさい。」エレミヤ書 36:6)。その務めは簡単なものではありません。それでも、エレミヤに命じられたバルクは何度も語り続けました。心が折れそうになっても何度も語り続けました。全ての者が神に立ち帰ることを期待しながら語り続けたのです(「この民に向かって告げられた主の怒りと憤りが大きいことを知って、人々が主に憐れみを乞い、それぞれ悪の道から立ち帰るかもしれない。」エレミヤ書 36:7)。



私たちもまた同じ務めに招かれています。どれほど厳しい状況であろうとも神の言葉を伝え続けるという務めに(「御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい。とがめ、戒め、励ましなさい。忍耐強く、十分に教えるのです。」テモテへの手紙二 4:2)。「その時」がいつ来るかはわかりません。しかし、いつ来てもかまわないように私たちは今日も神の言葉を聞き、語り続けるのです。